五條小学校通信

2009年９月29日

第５号

かけはし

耳と心をすませば

休日参観で１日ずれましたが、シルバーウィークの５連休はいかがでしたか。２学期が始まって少し疲れかけていた心や体をリフレッシュすることができたでしょうか。

夜道を歩いていたら、植え込みで「チン、チン」と鳴いている。今年はじめて聞くカネタタキだ。コオロギの仲間で、鉦をたたくように鳴く。立ち止まって耳をすますと、別の葉陰からもチン、チン…。秋が耳の奥へ広がっていく。

12 ヶ月を音のイメージで表した「音の歳時記」という詩が、那珂太郎さんにある。一月は「しいん」。厳冬に天地は静まる。二月は「ぴしり」。春が兆して氷が割れる。三月の「たふたふ」は雪どけの川。詩人の感性は、さすがにみずみずしい。

四月は「ひらひら」。野を越えて蝶が飛ぶ。五月は「さわさわ」と風が渡る。六月「しとしと」。七月の「ぎよぎよ」は蛙の合唱だ。そして八月の「かなかなかな」から、九月は「りりりりり」。音の呼びさます季節感も趣は深い。

その詩さながらに、東京ではここ数日で、樹上の吹奏楽から草むらの弦楽に楽団が変わった。カネタタキはささやかな打楽器か。虫の声の移ろいは、太陽の季節から「もののあわれ」の季節への、舞台の巡りを人に教える。

昔は、虫の音にも「聞きなし」があった。リーリーと鳴くコオロギの声を「糸刺せ、針刺せ、つづれ刺せ」と聞いたそうだ。冬着の繕いを急がせる声だという。夜が静かだったころの炉辺の想像である。

那珂さんの詩は、十月「かさこそ」、十一月は「さくさく」と続く。落ち葉と、霜の朝である。十二月は「しんしん」。雪が降って、時の逝く音だそうだ。

心をすませば聞こえるかもしれない。ひびの喧噪から、時には心身を解き放つのもいい。

〈2009.9.5　朝日新聞　天声人語より〉

この後も、社会見学や運動会と、子どもたちにとってはまだまだ忙しい日々が続きます。でも、そんなときだからこそ、心にゆとりをもった落ち着いた生活をしたいものですね。耳をすまし、心をすまし、時が移ろいゆく音を聞いてみるのもいいかもしれません。

休日参観の感想です

学習参観

○人前に立つのがきらいな子ですが、皆の前で涙ながらに一生懸命話せたこと、一つ成長できたなあと思いました。これからも、一つ一つゆっくりと自分のペースで大きくなってほしいなあと、心から思います。（１年）

○大勢の前で緊張したのか、楽しかった思い出でも泣きながら発表している姿を見て、頑張って！と心の中で応援していました。この先大きくなって人前でお話できるころには、この日のことをなつかしく思い出すことでしょう。（１年）

○英語の勉強を、単語ではなく文章として教えてくださっていたことにおどろきました。今からこうして身近な会話を文章として教えてもらえれば、中学からの英語の勉強にも少しは自信をつけていけるように思いました。これからも、いろいろな経験をさせていただければと思います。（５年）

○英語の授業も実用的で、私たちのころとはだいぶ様変わりしているのを感じます。実際の買い物をしたりしてとても楽しそうで、子どもたちも外国に行っているような感じでとても良かったと思います。（５年）

○それぞれの班で考え平均値を出す案はおもしろかったです。ただ、学年が上がるにつれ発表の声が小さくなる傾向にあるなあと、下の学年の子どもたちと比較して思いました。（６年）

人権教育講演会

○さすが元アナウンサーの皆さんだけあり、一声出された瞬間から皆を話に引き込む力はすごく、話の情景が一部始終目の前に浮かんできました。思わず胸にしみこんで涙した話もありました。

○「親子で聞く朗読」は、落ち着いてじっくり聞くことができました。私は、話の場面を想像しながら聞いていたので、時間がとても早く過ぎたように思いました。特に「さっちゃんのまほうのて」の話が印象に残りました。すごく感情を込めて朗読されていたので、その思いがひしひしと伝わり目頭が熱くなったところもありました。子どもに、「今日の話どれが良かった？」と聞くと、「う～ん、どれも良かったけど昔話がおもしろかった。」と言っていました。ほんの少しのことがきっかけで、積極的に本を読むようになったらうれしいなあと思います。